

多田南嶺と天津禪師

神谷勝広

- 一、天津禪師の生涯
 - 1 大広寺の碑
 - 2 山本屋弥右衛門家
- 二、南嶺関係写本に見える天津禪師
 - 1 『宮川日記』
 - 2 『桂花抄』
 - 3 『和歌物語』
- 三、南嶺浮世草子『忠盛祇園桜』

要旨

多田南嶺（一六九四？～一七五〇）は、神道・有職故実・歌学などの学者であったが、浮世草子作者でもあった。南嶺は作者として自分の名を表に出すことなく、八文字屋の代作者として活動した。拙稿「多田南嶺の浮世草子——当代俳壇との関係を軸に——」（『近世文芸』七十一号平成十二年一月）で推定したように、現段階では少なくとも三十作品が南嶺の著述と考えられる。浮世草子作者としては、江島其磧に次ぐ多作である。

右の拙稿では、南嶺の身近な俳人達が多く登場することを指摘したが、もちろん、南嶺は俳人のみをモデルにしたわけではない。南嶺の友人、神沢杜口が『翁草』で、「凡嶺に会する人、渠に書かれざるは希なり」といっている。まだ多くのモデルが存在するであろう。本稿では、撰津池田の出身であった天津禪師に関して考察する。

一、天津禪師の生涯

拙稿「多田南嶺の浮世草子——当代俳壇との關係を軸に——」は日本近世文学会平成十一年春季大会での口頭発表に基づく。その発表資料に、浮世草子『忠盛祇園桜』に登場する、浦辺季猛の末裔玄晋坊について、モデルの存在を推測できると記しておいた。具体的には、南嶺の知人で浦辺季猛の子孫と称する僧侶天津を想定した。玄晋（げんしん）と天津（てんしん）で音が似通い、共に浦辺季猛の末裔と称し、かつ僧侶であることから推測した。

発表後、藤原英城氏より、天津禪師に関する碑が池田の寺に残っている旨の御教示を受けた。池田の諸寺を調査した結果、大広寺に六角形をした碑が見出せた。そこには、碑文も備わっていた。

（正面）

天津禪師塔

（左側面から裏面、右側面にかけて）

師諱頼寛称十五郎阪上氏池田人年十九為

僧受業于黄檗僧法源自号素納後改号天

津之廬于城山薪水自給以修其道元文

四年乙未十有一月二十有八日病卒年

六十有四余係師之裔孫恐其事蹟之

湮滅而廬側有石師之所恒坐禪也乃
移請大広寺塋次碑于其上以誌其梗

概実寛政六年甲寅冬十有二月也

阪上□補撰

これによって、

①、天津禪師の生没年次（一六七六〜一七三九）が確定する。

さらに、碑の存在によって、重要な問題が浮かんできた。碑の西側に、山本屋（坂上氏）弥右衛門家関係の十数個の墓石が並んでいた。

山本屋弥右衛門家は酒造業を営んでいたが、文化人との交流が盛んな家である。詳しい論証は、別稿を用意するが、延宝の頃の弥右衛門（俳号西夕）は、西山宗因・井原西鶴と関わる。『西鶴大矢数』にも登場する。また、貞門の宮川松堅とも交際が深く、松堅からは「友」と遇されていたようである。元禄の頃の弥右衛門（西夕の息子、俳号稲丸、弥右衛門と名乗る前は十五郎）は、水田西吟と付き合いが濃い。松堅とも関係を維持しており、松堅の弟道達（『訓蒙故事要言』の編者）とも仲がよい。また、同じ池田住の清地以立（『通俗呉越軍談』『通俗武王軍談』の編者、松堅の和歌の門人）とも親しい。というよりも、以立の家（柳屋町）と弥右衛門家（米屋町）は隣接する地域にある。歩

いて数分以内であったと思われる。以立は弥右衛門家にとつて、かかり付けの医者であったと推測してもよいかもしれない。さらに、文政二年（一八一九）に他界した弥右衛門（俳号竹外）は、天明四年（一七八四）に俳人几董に入門している。天津禅師もまた、この文芸好きの一家の者なのか。

天津禅師の俗名が碑文によって坂上十五郎と判明している。俳号を稲丸と名乗った弥右衛門も、若いとき坂上十五郎と名乗っていた。よって、この一家では、通称十五郎を用いることがあったと考えられる。しかし、まだ若干不安が残る。さらに傍証を求めたところ、『伊居太神社日記』（『池田市史』資料編収録）に、次のような記事が見つかった。

正徳四年四月四日

京天津和尚柳季より状来来る

享保二年九月九日

天津和尚御出

享保二年九月十日

和尚大坂へ御出

享保二年十月十四日

夜山本や弥右エ門殿へ見廻、天津和尚一昨日京へ御上り

享保十八年二月十七日

京都天津和尚十四日太郎右エ門殿へ御出

享保十八年二月二十六日

九ツ時より天津和尚御出

元文四年十一月廿七日

夜京都にて天津和尚偃化

元文四年十二月四日

天津和尚死去米や丁へ悔に遣

やはり天津禅師は山本屋弥右衛門家と関わる。享保二年十月十四日、山本屋右衛門家で天津禅師の消息を聞いているし、天津禅師死去に対する悔やみを遣わしたのが「米や丁」とあるがこれも米屋町にあった弥右衛門家を指すのである。さらに、池田市立歴史民俗資料館蔵蝸牛廬文庫の『浦辺観世音尊像記』によっても、天津禅師と山本屋弥右衛門家が関わる事がうかがえる。

浦辺観世音尊像記

柏葉山季猛寺、其旧在泉州高師浦、曰広長寺、又曰浦

辺寺、長元中、浦辺季猛、遷之摂州河辺郡九城邑、且

転祖季猛第宅、以寺、改曰季猛寺、又曰九城院、時僧

都源賢、幼名美文丸、手彫刻大土尊像安置之、称曰浦

辺観世音、蓋具心坊大庇之開基而真言之巨刹也、而歴

星霜五百年許、寺業漸衰、永祿中、遂以廢絶矣、今如

日蓮宗九城寺是其旧址也、山本村人某、護藏尊像於其家、又二百年許、有天津老禪者、季猛之裔也、搜索尊像、而補欽加飾、敬仰不怠、有山本弥右衛門頼定者、亦季猛之裔也、及老禪没、厝之其山莊、亦以敬仰傾因靈山和尚之求、遷座於涌潮峰大広寺禪寺之僧堂、和尚且求記其顛末、回就旧録、考抄之、書以奉之云、

宝曆三年癸酉五月 荒木定堅 敬書

これらから、

②、天津禪師は酒屋山本屋弥右衛門家の出身である。

と考えられる。また、『伊居太神社日記』の記事の内容から、

③、天津禪師は基本的に京都住であり、病死したのも京都であった。

と判断してよからう。

山本屋の一族は、浦辺季猛の末裔であるという伝承も有する。これは、先に示した『浦辺観世音尊像記』でもうかがえるが、同じく荒木定堅(号蘭阜)の漢詩文集『鵝肋集』(明和元年刊)にも次のようにある。

天津禪師

曼公何豪傑 儼然季猛裔 廿年割妻子 塵網頓蟬蛻

禪余耽国風 摺紳多結契 扱幽七構居 不是身後計

したがって、

④、天津禪師は、浦辺季猛の末裔と称し、周囲からもそう認知されていた。

と見なしてよからう。以上、①②③④の点に関しては、確認できたものと考え

二、南嶺関係写本に見える天津禪師

天津禪師は南嶺よりも二十歳程年上であったが、両者は親しく付き合っていたらしい。

例えば、南嶺が伊勢へ旅行した時の記録をまとめた者に『宮川日記』がある。同書の付録の中に、天津禪師から奇妙な火打ち石を貰ったことが、その石の図まで模写して書かれている。そして、

浦辺季猛の正孫摂州の国山本にて坂上党と号す、其本山山本太郎右衛門後禅僧となり、天津和尚といふ

とある。ここでは、天津禪師のことを「山本太郎右衛門」としてゐる。太郎右衛門家も弥右衛門家も同族である。南嶺の単なる間違いなのか。この点は、現段階では未詳といわざるをえない。ただ、

⑤、天津禪師と南嶺は、親しい関係にあった。

このこと自体には問題ない。

天津禪師は学識も備えていた。俳諧・和歌に関して知識

があり、それを南嶺へ伝えることもあった。

まず、俳諧関係では『桂花抄』収録の記事、「七柏之伝」が注目される。^③

右を七柏と云、貞徳より門人重頼（割注、維舟と号、

本名宮川正見）相伝、重頼より天津和尚相伝、天津より貞室自筆の巻物、秋齋え相伝、淡々えも秋齋より写し遣すよし、淡々より天の賜と謝礼の一通有し也

『桂花抄』で問題となるのは、重頼のことを本名宮川正見としていふことである。宮川正見の表記は誤りで、宮川松堅を指すと思われる。重頼と松堅は別人である。では、天津禪師が俳諧を学んだのは、重頼なのか松堅なのか。この点は、先に述べたが、山本屋弥右衛門家は松堅と親しくしており、俳号を稲丸といった弥右衛門は伝授も受けている。そのことを踏まえれば、

⑥、天津禪師は、俳諧を貞門の宮川松堅から学び、その内容を南嶺に伝えることがあった。

と考えるべきであろう。

また、和歌関係では『和歌物語』に注意すべき記事が見える。^④二十六段、

風早実種卿へ天津和尚親しく仕へ、和歌の道を学ばれしに、卿、志を感じ給ひて、古歌を見る事さへよくなれば、歌はよまるゝものなり、其見やうといふは、一

首五句の内、題意の有所を見付るが、古歌の見やうなりとて、伝受したまふ。

天津禪師は、風早実種に仕えたとしている。実種は、姉小路公景男、風早家始祖で、権中納言正二位の貴族である。宝永七年（一七一〇）に七十九歳で他界している。また、五十九段では、

拾遺集恋の四、

みなといりのあしわけ小船さはりあふみなおなし人
にや恋んと思ひし

実陰卿の御話に、文字余りの歌は、是を手本によむべし、此歌、三句に文字余り也、しかれども、耳にたゞず、歌のしらべよく読たり、かようのしらべによむ事をえずば、文字余りの歌、かならずよむべからずと、天津和尚へ度々仰られしとぞ

実陰は、武者小路実陰である。権大納言従一位、元文三年（一七三三）に七十八歳で他界した貴族であるが、天津禪師は実陰からも教えを受けていたことがうかがわれる。これらから、

⑦、天津禪師から南嶺へ、和歌に関する知識も伝えられている。

と考えてよい。

三、南嶺浮世草子『忠盛祇園桜』

天津禪師は元文四年十一月二十八日（『伊居太神社日記』ではその前日）に京都で病死するが、南嶺はこの報をどこで聞いたのか。元文四年から五年にかけての南嶺の動向は不明であるが、江戸や尾張などの地域へ出かけていた形跡は今のところない。よって、この時期、南嶺は上方（おそらく京都）にいて、天津禪師他界の知らせをすぐに耳にしたのではなからうか。

まさにこの時期、南嶺は来春に浮世草子三作品（『忠盛祇園桜』『龍都倭系図』『逆沢瀉鑑鑑』）の刊行を予定していた。このうちの一つ『忠盛祇園桜』の大筋は次のようなものである。

白川院は祇園の茶屋の仲居に惚れ、忠盛に仲立ちをさせ想いを果たす。しかし、身分を考え、その女（祇園女御）を忠盛に与える。祇園女御は既に懐妊しており、男子（後の清盛）を出産する。これに対し、多田源氏の正統多田頼俊は遊女にのぼせ上がり放蕩を繰り返していた。頼俊の従兄弟多田頼憲は、忠盛の力を借りつつ、白川院へ頼俊を讒言し、多田の家督・所領を乗っ取る。その後、祇園女御の産んだ男子（清盛）が白川院の胤でないことが発覚する。実は、佞臣忠盛が仕組んだ悪事とわかる。頼俊は忠臣たち

の努力によって勘気を許され、忠盛の後ろ盾を失った頼憲から家督・領地を奪回する。

この主筋（忠盛の盛衰、頼俊・頼憲の家督争い）に、複雑な人間関係を絡ませて作品は成り立っている。

ここで、南嶺は一つのことを思い付いたのではないか。他界した天津禪師は浦辺季猛の末裔として知られていた。自分が執筆中の浮世草子『忠盛祇園桜』は、多田頼俊が主人公である。多田頼俊は、浦辺季猛の主君多田満仲の子孫にあたる。頼俊の忠臣として、天津禪師を意識した登場人物を造型し活躍させても、話に矛盾は起きない。これによって、天津禪師をイメージした玄晋坊が『忠盛祇園桜』に描かれることになったのではないか。作品の中で、玄晋坊は勇ましく登場する。

かく申玄申坊は、御先祖満仲公につかへし、浦辺の季猛に四代の末孫、出家となりてくらせ共、氏素性は忘れぬ

そして、放蕩三昧の頼俊を諫め、存分に忠臣としての働きをなし、敵方からも、

何を申ても頼俊事、一たんは私の舌さきにかけてばい
込しか共、浦部入道玄晋坊が一党、付そひるれば、い
か成てだてをかめぐらすべき

と恐れられる。

天津禪師の生涯、そして南嶺との関係が明瞭でなかった段階では、天津禪師は南嶺の知人であったからモデルになったのであろうと単純に推測していた。しかし、ここまで述べてきたことからすれば、南嶺は天津禪師への哀悼・鎮魂の気持ちもあつて、浮世草子の中に天津禪師のイメージをかぶせた人物（玄晋坊）を登場させているのだと思う。

注

- (1) 『鶏肋集』は池田叢書による。
- (2) 『宮川日記』は架蔵本による。
- (3) 『桂花抄』は大阪市立大学附属図書館蔵森文庫本による。
- (4) 『和歌物語』は『近世和歌文学誌』第一集の翻刻による。適宜、濁点を付した。
- (5) 古相正美氏『国学者多田義俊南嶺の研究』（勉誠出版）所収の南嶺年譜参照。
- (6) 『忠盛祇園桜』は八文字屋全集による。

